



関西学院大学災害復興制度研究所ニュースレター

FUKKOU

Vol.26

contents 目次

- 巻頭言
執拗に、諦めず、復興の課題に取り組む
/ 野呂雅之 …………… 1
- 報告「2015年復興・減災フォーラム」
 - ▶全国被災地交流集会
震災バネがつなぐ復興への想い
/ 長谷川司 …………… 2-3
 - ▶リレートーク
届け 震災バネが伝える復興への想い
～ KOBE から TOHOKU へ
/ 福田 雄 …………… 4-5
 - ▶解題
災害復興と震災バネ / 山中茂樹 …… 6
 - ▶ワークショップ・公開セミナー …… 7
- 動画配信感想
貝原さんの『ラストメッセージ』
/ 矢野奨 …………… 8
震災バネがつくった私の人生
/ 染谷亜紗子 …………… 9
企画授業「震災バネがつくったわたしの人生」を受講して / 宮崎汐里 … 10
- 観感学楽
笑顔の裏にある「思い」を伝えたい
/ 右田可奈
ボランティアセンターの新しい形
/ 頼政良太 …………… 11
- 研究所年間活動報告 …………… 12-15
- ともに
掲げ続けよう 復興リベラリズムの旗を
研究所人事
日本災害復興学会 会員募集中!! … 16

執拗に、諦めず、 復興の課題に取り組む

災害復興制度研究所
主任研究員・教授

野呂雅之



朝日新聞の記者から研究者に転身し、この春、災害復興制度研究所の主任研究員に就きました。朝日新聞では論説委員、編集委員、災害専門記者として被災者の視点から政策提言や制度設計につながるような社説やコラムを書いてきました。その経験から復興の課題は複雑かつ多岐にわたることを実感しています。だからこそ、「被災者のために」という姿勢を変えることなく、執拗に、諦めず、課題の克服に取り組んでいきたいと考えています。

32年の記者生活で大きな転機になったのが、1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災でした。

戦後50年、その節目の年に起きた震災は、わずか10数秒の揺れで6434人も犠牲者を出しました。戦後築き上げてきた文明社会の脆さをさらけ出したのが震災でした。

震災から2年後、朝日新聞神戸支局（現総局）のデスクに赴任して、仮設住宅で相次ぐ孤独死に向き合ってきました。「人生80年」の時代に壮年の男たちの孤独死が多く、彼らの生涯をたどると、その人生は驚くほど似ていました。

貧困から抜け出そうと懸命に働いたが、慢性の病気で仕事ができなくなり、家賃の安い家を探しては転居を重ね、震災後に病死や自殺で生を閉じる――。

それは仮設住宅だけの特殊な現実ではなく、豊かな社会という幻想に覆い隠されて、震災前は私たちが見えていなかっただけではないか。被災地に身を置くことで、そのことに気づかされました。孤独死という「見えない死」を震災があぶり出したのでした。

街並みがきれいに復興するにつれ、多くの被災者が取り残されていると感じて、孤立感を深めていきました。被災者が10人いれば、復興には10通りのプロセスがあります。そこで見えてきた被災者個人の抱える課題から普遍性を探っていけば、社会の仕組みを変えていくことができるはず。それには長く地道な取り組みが必要であり、粘り強く主張し続けなくてはなりません。

記者にも研究者にも共通して大切なのは、被災した人々に対して「あなたたちを忘れていない」というメッセージを伝えることだと考えています。

震災20年の節目となった今年1月、本学の人間福祉学部の池埜聡教授、坂口幸弘教授と朝日新聞が共同で実施した震災遺族の意識調査にも、そうした思いを込めました。調査では、回答者の半数以上が、亡くした家族を今も「恋しく、いとoshii」と感じているなど、街並みとは違う「心の復興度」が見えてきました。一人ひとりが故人への思いとどう向き合ってきたのか。東日本大震災の遺族にとっては、家族をしのぶその思いが「道しるべ」になるのではないかと考えて、企画した調査でした。

被災者のための研究と実践に主眼を置いている研究所の取り組みは記者の仕事と共通項も多く、現場を重視するという考え方は同じです。

復興に携わる人材を育てるため、教育にも力を入れて、研究所の理念である「人間復興」のあり方について次代を担う若者たちと議論を深めていきたいと思っています。

2015年

復興・減災フォーラム

全国被災地交流集会《円卓会議》

2015年1月10日(土) 関西学院会館 光の間

震災バネがつなぐ復興への想い

阪神・淡路大震災20年の記念フォーラムは「震災バネ」をキーワードに、被災地 KOBE から TOHOKU に至る各地の復興現場で、逆境にめげず、人に、地域に寄り添い、再生への営みを続ける人たちにお集まりいただき、それぞれのバネのはたらかせ方を語ってもらった。(所属・肩書きは開催当時のものです。)

第1部 人に寄り添う



村井雅清

被災地 NGO 協働センター・代表



能島裕介

特定非営利活動法人
プレーンヒューマニ
ティ・理事長



八木俊介

あしなが育英会神戸レ
インボーハウス・チー
フディレクター



中埜翔太

神戸市外国語大学4年
震災遺児



西山祐子

一般社団法人みんなの
手・代表理事



西崎伸子

福島大学行政政策学類
准教授



古部真由美

東日本大震災県外避難
者西日本連絡会まるっ
と西日本・代表

阪神淡路大震災から20年、「一人ひとり」個を尊重すること、潜在力の発揮を妨げないこと、そして持続性が課題とされてきた。災害によって人のもつ潜在的な力が発揮されることがある。ただし、何らかの土台がなければ「バネ」が跳ね返ることはない。「こんなことがあっていいのか」という、現状への疑問。震災バネを動かすものの一つとして、不条理なものに対する義憤が挙げられる。その背景には、社会のあり方への思い、怒り、疑問がある。

東日本の復興は非常に難しい問題を抱えている。なかでも現在進行中で着地点も見定められない福島の問題がある。福島から避難した方々がいる。県外避難者の孤立を避けるため、生活、子育てのためには何よりも情報が必要になる。そこで、行政およびNPOや企業のサービスの案内、避難先でのコミュニティづくり、「ふるさと」とのつながり、避難者間、避難者と地元、避難者と支援(者)をむすぶネットワークを構築する活動がつつけられている。

県外避難者への情報発信においては、できるだけ早く、状況に見合う情報を伝えたい。その際、それまでの子育て、生活から得られた経験が生かされている。一緒に活動する仲間、草の根の仲間が存在なしには活動はすぐ行き詰まってしまう。支え合う仕組みなくして活動はつつけられない。さらに、長期化する問題に継続して取り組むには、一方で仲間たちと楽しくやることも必要である。

阪神淡路大震災さらにそれ以降の現在、復興をめぐる活動

は、支え合い、一人ひとりに情報を伝えるなど、「個の大切さ」をベースに展開される点で多くの共通性がある。復興を個々人の復興の「束」のごとく一つかみにとらえてはならない。また、直線によって示されはしない。曲線でしか描かれない個々の人生がある。「復興」と一口に言っても、その中には一人ひとりの復興があり、復興は一本一本の糸が織りなすものである。さらに、一人ひとりの復興は、関係の中にあり、その人がどのような環境で過ごして来たかによって変化が出てくるものなのであろう。そこで、「バネ」を動かせる上で、バネに力をあたえる支え合いの関係をとりまくコミュニティや地域が重要になってくる。

第2部 地域に寄り添う

阪神淡路大震災、鳥取県西部地震、中越地震、三宅島噴火、岩手宮城内陸地震そして東日本大震災、それぞれの復興における地域活動について報告がおこなわれた。

災害は様々だが、復興は地域に寄り添ったプロセスである。では、地域における活動とくに「地域おこし」はどのように行われてきたのか。

個人の気持ちや活動だけではうまくいかない。そこで仕組みや制度がいる。地域活動を通じ、再確認されるのは、個人の生活がコミュニティ、地域社会といった基盤の上に成り立っているということである。「支え合い」とは状態であり、地域における継続的な活動をもとに「支え支えられ」の関係が姿を現し



中村順子
認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸・理事長



野崎隆一
NPO法人神戸まちづくり研究所・事務局長



山下弘彦
日野ボランティアネットワーク・コーディネーター



稲垣文彦
公益社団法人中越防災安全推進機構・復興デザインセンター長



上村靖司
長岡技術科学大学教授



宮下加奈
ネットワーク三宅島代表



伊藤廣司
元花山震災復興の会「がんばっぺ」事務局長／宮城県栗原市



義元みか
天栄むすび屋／福島県岩瀬郡天栄村



藤田浩志
ふじた農園安子島米米生産倶楽部／福島県郡山市



染谷亜紗子
花泉酒造合名会社／福島県南会津郡



曾田めぐみ
女子の暮らしの研究所／福島県郡山市



北村育美
福島大学 心くしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター



宮本匠
京都大学 防災研究所 特定研究員(コメント)



山中茂樹
災害復興制度研究所(司会)

てきている。

人を育てるのは容易なことではない。しかし、活動する姿を見せつつ、活動する人々を支えることが、震災バネを育むことにつながるのかも知れない。

東日本大震災は人口減少社会のなかで起こった。そして人口減少の切っ先にある地域が被災地になってしまった。災害は、それまで内包されていた社会のひずみやゆがみによって生まれた問題を表面化させる。災害は潜在的な問題を顕在化する側面がある。気づききっかけは災害、しかし、地域の視点から見ると、復興における課題は災害以前から始まっている。

地域を知り、魅力を感じた人々が災害をきっかけに活動をはじめ。ただし、災害復興は、単純に町や村が「きれいになる」といった問題ではない。災害が起こる前に地域を戻すだけでなく、もともと弱まっていた地域にいかに力をつけていくかも課題となる。

福島でも、震災をきっかけに、様々なプロジェクトが立ち上げられた。そして、地域に入った人々が、福島の現状を知り支援をつづけ活動の幅を広めてきている。さらに、支援だけではない。福島県の農家では放射性物質検査はもちろん、安全性の確保にとどまらず、「おいしさ」を追求する新たな挑戦がすすめられている。以前の状況に戻すだけでなく、新たな試みで挑戦する推進力が働いているのである。

災害をきっかけとする活動が、災害以前からの地域課題への取り組みにつながる事例が数多く紹介された。継続的な活動、被災地間のネットワーク、支援の連鎖へと広がり深められてきている。また、支援のため地域に入ったボランティアの人々が被災者のかたから元気ももらう姿がある。ここには、エネルギーの交換によって、互いが元気になっていく関係を見出すことができる。

第3部 震災バネと災害列島

「震災バネ」に着想を与えた、室崎益輝前所長（「復興バネ」）が「バネ」のイメージで伝えたかったのは、その推進力であった。ただ単に、縮んだバネが元の状態に戻るのではない。強調されるべきは、上方へつきぬけていくイメージである。人々もがき、苦しみの中で必死に汗を流した努力が報われる。その際、前よりもいい社会ができる、東北でもきっとそうなるんだ、という信念のもとに「バネ」をどうきかせるか、「バネ」とはいたい何か、人の動きに着目し問いを鍛えていく必要がある。

「震災バネ」についての話しは尽きない。この円卓会議の大きな目的の一つは、ネットワークづくりにある。10年を迎えるつながりの中から学会が生まれ、災害時に助けに行くというネットワークが構築されてきた。今後、円卓での議論をもとに、新たな研究テーマの発見、現場と研究の融合、現場に生かされる知につながることを期待したい。（報告・長谷川司）



長島心一
東北学院大学 災害ボランティアステーション前学生代表



宮崎汐里
中央大学 被災地支援学生団体ネットワーク



渡邊恵理香
動画配信授業受講生／岩手県盛岡市



土方正志
出版社「荒鍛夷」代表取締役／宮城県仙台市



矢野奨
河北新報社 報道部副部長



室崎益輝
公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 副理事長(コメント)

届け 震災バネが伝える復興への想い ～ KOBE から TOHOKU へ



妹尾和夫
劇団パロディフライ
座長



魚住由紀
防災・復興コミュニケー
ター

フォーラム二日目は、阪神・淡路大震災（第一部）と東日本大震災（第二部）に分かれ、それぞれの当事者が二名ずつ登壇するリレートークが行われた。ラジオ番組「ネットワーク1.17」で長年パーソナリティを務めてきた妹尾氏と魚住氏が司会となって、登壇者の震災の経験や、その後の生活について話を伺った。



加藤りつこ
広島と福島を結び会
会長

まず第一部は、阪神・淡路大震災の遺族である加藤りつこ氏と中埜翔太氏から当時の体験が分かち合われた。

加藤氏は、当時学生だった一人息子、貴光さんを阪神・淡路大震災で亡くされた。貴光さんは震災の二年前から、生まれ育った広島を離れ、神戸大学に通うため西宮市夙川のアパートに下宿していた。

貴光さんの安否を確認できないまま、加藤氏は翌朝一番の飛行機で伊丹空港に降り立った。約14キロの道のりを歩き、ようやく夙川のアパートに着いたのは午後3時頃だった。加藤氏は、そこで貴光さんの死を知らされたが、それを受けとめることはまだできなかった。小学校の遺体安置所では余震が起きるたびに貴光さんの亡骸に覆い被さった。もう動かない息子の体を守ろうと覆いかぶさることを繰り返すうちに、もはやその必要がないことを痛感し絶望したという。そのときふと自身の免許証入れに入れていた貴光さんの手紙のことを思い出した。そこには、世界で羽ばたくという貴光さんの夢と、これまで育ててくれた親に向けた感謝の言葉が綴られていた。加藤氏はその手紙を、新大阪から広島までの新幹線のなかで何度も読み返したという。

震災から13年後、貴光さんの手紙はある音楽家の手によって一つの楽曲となった。見ず知らずの音楽家によって編まれたそのメロディーの美しさに加藤氏は衝撃と感動を覚えたという。連絡をとってみると、その音楽家は息子と同年の青年だっ

た。偶然とは思えないこの出会いに複雑な気持ちも覚えた。それまでは未来のことを考えることがまったくできなかったけれども、様々な方と出会い交流を続けていくうちに、私にもできることがあるんだと思えるようになったという。現在は「広島と福島をつなぐ会」の代表をしている。



中埜翔太
神戸市外国語大学 4年

二人目の登壇者である中埜氏は、阪神・淡路大震災で実母を亡くされた。当時3歳だった中埜氏には、母の記憶はほとんどないという。しかし震災に襲われたそのときの様子はいまだに鮮明に記憶に残っている。祖母が朝食の準備をしていたその光景、中埜氏が遊んでいた人形、そして震災とともに崩れ落ちた土壁

の匂い。震災発生から数時間後、中埜氏は崩れ落ちた祖母の木造住宅のがれきの下から助け出された。母の死を自覚したのはそれからずっと後になってからだった。父方の祖母に養子として引き取られた後、小学校の授業参観のときに母がもういないと実感した。小学校1年生頃から、あしなが育英会の運営するレインボーハウスに出入りするようになった。そこでは同じ状況の子どもたちと思いきり遊び、気兼ねなく感情を吐き出すことができた。そこで出会った震災遺児の方々とは、今だに交流が続いている。

中埜氏は、震災後の多くのの方々との出会いがなければ今の自分はなかったと感じているという。高校生のときにハイチと四川で大地震が起り、あしなが育英会の職員の方から、震災遺児の支援にかかわってみたいかと誘いを受けた。自分に何ができるのかと、はじめは戸惑いを覚えた。レインボーハウスで自分が遊んでもらったように、子どもたちと一緒に遊び、絵を描いたり、ともに時間を過ごした。母親を亡くした自身の体験を語ると、彼らは真剣に耳を傾けてくれた。その後、東日本大震災の被災地にも20回ほど通い、子どもたちと一緒に遊んでいる。震災遺児を育てている保護者の方々から、「ショウタくんをみていると希望を持てる」「これからも来てね」と声をかけられ、今後もこうした活動にかかわりを持ち続けたいと思っている。震災があっただけよかったとは言えない。けれども、阪神・淡路大震災がなければ、それはそれで怖いという気がする。思ってくれている人がいて、支えてくれたおかげで今の自分があると受け止めているという。

第二部は、東日本大震災発生当時に福島市に居住していた二人の女性に登壇していただいた。



西山祐子

一般社団法人みんなの手
代表理事

震災の二年前から、西山氏は出産を契機に福島に居住していたという。二歳の子供を寝かしつけたその直後、西山氏は震災に襲われた。震災直後はなかなか新聞もテレビも見ることができていなかったが、翌日東京の友人から連絡を受け、状況の深刻さを知るに至った。家族からの反対を受けたが、一週間後の3月18

日に東京に母子で避難した。その後一旦福島市に戻ったが、6月頃には区域外避難者の支援が手厚い京都に母子で避難したという。当時住んでいた公務員住宅には、そのほかにも多くの避難者がいたが、避難者同士の情報共有の場がなかった。そこで西山氏は、ネットワークづくりと情報発信を目的とした交流会をポスターで呼びかけた。2011年8月に避難者有志の会を立ち上げた後、多くの支援が集まった。その支援の輪を、自身の住む集合住宅だけでなく多くの避難者にも広げるために「みんなの手」という団体を発足させた。

現在は、避難者同士の情報発信やネットワークづくりだけでなく、福島とつながり、ふるさとの「今」を発信するプロジェクト（福島の家族や友人と再会するプロジェクトや、福島の代表的なお菓子を出す「みんなのカフェ」の運営など）に取り組んでいる。震災以降、避難者をめぐる様々な意見と接してきた。西山氏自身、福島を離れ避難する決断を下したが、他方では福島で生きていくと選択した方々がいる。避難者のニーズ、そして生活をとりまく状況が刻一刻と変化するなかで、様々な背景をもつ方と出会い、皆がそれぞれの立場で頑張っていると感じるようになってきた。時間が経つほどに、何が正しいのか自分でも分からなくなってきている。今は、絶対に正しい答えなどはないと考え、なるべく人の心を傷つけずに、みんなで1つになれるような方向を向いていこうと考えている。



西崎伸子

福島大学行政政策学類准
教授

最後の登壇者は、福島大学でアフリカの地域研究を続けてこられた西崎氏だった。震災発生後、保育園にいた娘を引き取り、自宅で待機した。3月11日の夜以降、様々な情報がメールを通じて知らされた。翌日からは、大学教員である夫とともに学生の安否確認に追われた。自宅内を目張りしたり、玄関前で外で着た

カッパを脱ぐなど工夫しながら、夫婦交代で娘の面倒を見ていた。しかし3月15日に原発の線量がはね上がったことをきっかけに、悩みながらも娘を一時避難させようと決意した。栃木県の那須塩原駅までタクシーを手配し娘を知人に預けた。西崎氏は、娘と新幹線のホームで別れたときに、自分の人生がリセットされてしまったように感じたという。その後、娘が心待ちに



していた小学校入学式のために一旦娘を呼び戻すことになった。その後二年ほど福島市で生活したが、娘の生活を制限せざるをえない暮らしに疲れを覚え始めた。2013年の3月には、夫と娘を兵庫県の丹波篠山市に避難させることにした。

その後も西崎氏は福島市に留まり、福島に戻ってくる方々の支援活動に携わっている。避難した人、残った人のあいだで微妙な温度差を感じている。ママサロンというグループで、様々な背景をもつ方々が自由に語り合える場に関わっている。震災後、それ以前に比べママ友との関わりが格段に増えた。子供を地域社会のなかで育てること、社会のなかでの女性の立場などを自然と考えるようになってきた。農村社会である福島市では、女性は何々家の嫁という立場であり、前近代的な家父長制の問題が色濃く残っていると感じる。だからこそ女性の声が必要だと思われている。西山氏の話聞いてみて、当時あの場所に住む人が感じた気持ちが手に取るようにわかる。母として、研究者として、そして教育者として様々な思いがあった。これまでの研究では、アフリカの自然保護区から強制退去させられた人々の経験を聞き取ってきた。彼らの語る体験と、福島の避難者の体験は違いもあるが、共通点や分かり合える部分も多いように感じる。

(報告：福田 雄)

MBS ラジオ「ネットワーク1・17」とは

「被災者に向けた、被災者のための、被災者の支えとなる番組」とのコンセプトで、阪神・淡路大震災から3か月がたった1995年4月15日にスタートした。2002年度防災まちづくり大賞、2004年ギャラクシー賞選奨、日本災害情報学会「廣井賞」などを受賞。魚住由紀さんは、1995年4月から2012年9月25日まで17年間、妹尾和夫さんは、1996年4月から2008年3月24日まで12年間、パーソナリティーを務めた。

解題

災害復興と震災バネ

山中茂樹

災害復興制度研究所

阪神・淡路大震災から20年の企画授業、続く復興・減災フォーラムのテーマを「震災バネ」としました。神戸の大震災で「復興バネ」という言葉が生まれ、2004年の新潟県中越地震では、被災者のバネを動かす存在としての「若者、よそ者、バカ者」が注目をされました。そして、東日本大震災では、「ポスト・トラウマティック・グロース（心的外傷後の成長：PTG=Posttraumatic Growth）」「逆境の効用」というポジティブ心理学の用語がクローズアップされました。いずれも、被災という辛い体験でくじけるのではなく、逆にこの逆境を糧にして人として成長し、新しい災害文化を形成していくことを意味するのです。

私どもは「人間の復興」という理念の具体化をめざしています。もちろん、その実現には法制度の整備が大切ですが、一方で理念の実践化には、内に強靱（レジリエンス）なバネを秘めた人々の存在が重要なカギとなります。なぜなら、人間復興は、上から恩恵的に与えられるものではなく、自己決定権にもとづく幸福追求、つまり自らの力で道を切り拓いていくことが大前提となるからです。しかし、すべての被災者が強靱なバネを持っているとは限りません。そこで、レジリエンスな人たちのバネがどんな時に動いたのか。この人たちのバネは、どのような連鎖を生んだのか。動機と影響を解析することによって、次なる被災地に「屈しない力」の文化を伝達していくことができなしかと考えたわけです。

授業では、次のような人々においでいただきました。元兵庫県知事の貝原俊民氏、尼崎市長の稲村和美氏、山形県議の草島進一氏、NGO代表の村井雅清氏、ボランティアの黒田裕子氏、地域起業家の中村順子氏、宝塚市長の中川智子氏、建築家の野崎隆一氏、元兵庫県副知事で初代防災監の齋藤富雄氏の9人。そして、室崎益輝（研究所顧問）、高橋征仁（山口大学）、宮本匠（京都大学防災研究所）、そして山中の4人が解説を担当しました。黒田さんは、当時、病床にあり（その後逝去）、彼女の遺言で室崎先生が成り代わって講義に立たれました。また、貝原さんは、この授業のあと不慮の事故に遭われ、お亡くなりになるという悲しい出来事もありました。

9人の方々は、自らがバネを動かさせただけでなく、阪神の被災地のみならず、全国、世界の被災地にもバネの連鎖を及ぼそうとした人たちです。また、2015年復興・減災フォーラム初日の全国被災地円卓会議には、神戸のみならず、新潟県中越地震、三宅島噴火災害、岩手・宮城内陸地震、東日本大震災の

各被災地からも震災バネを動かしている人たちにお集まりいただきました。

それぞれのみなさんは自身のバネのみならず、周りの被災者、あるいは地域、さらには日本の制度にまで、バネを動かした、あるいは動かせようとしている人たちです。バネの動く災害フェーズも急性期、復旧期、復興期、防災期と、きわめて多面的です。

では、だれでも持っているといわれる、このバネの力を強靱にする方法はあるのか。円卓会議では、「それは難しい。そういう人が登場したときに邪魔をしないことだ」との意見が出ました。確かにレジリエンスの強弱は人それぞれです。ただ、被災地の子どもたちに問題解決のプロジェクトを課し、その過程でさまざまな専門家たちが援助するOECD（経済協力開発機構）の「東北スクール in Paris」は、一つのアイデアだと思われました。また、レジリエンスな力をもった人々を支援し、有機的に活躍してもらうための仕組みづくりも考えなければいけません。そのためには各地のNPOや大学、プロボノといわれる専門家ボランティアたちを登録し、活躍の場を提供していく中間支援団体の組織化なども考えていかなければなりません。

本日は、阪神・淡路大震災で家族を失いながら、その後、被災地支援で活躍されているお二人、原発事故で県外避難を余儀なくされながら避難者の支援に動いておられる避難ママお二人にご登場いただき、MBSラジオ「ネットワーク1・17」の名コンビだった妹尾和夫さん、魚住由紀さんに、それぞれの震災バネを解き明かしていただこうと考えております。



ワークショップ

2015年1月12日(月・祝) 於: 関西学院会館レセプションホール

災害ボランティア 20 年ワークショップ 「これからのボランティアと対話の力」

記念フォーラム3日目は、ボランティアと対話を主題としたワークショップと公開セミナー「阪神・淡路大震災の教訓から見た東日本大震災」が開催された。

ワークショップでは、まずはじめに、これまで国内外で数々のワークショップを手がけた経験を持つ平田オリザ氏が、演劇的手法を用いた参加型ワークショップを導いた。互いに声をかけあい、身体を動かしながら、相互理解を深めていくアイスブレイクを通じて、約30人の参加者は、ボランティアに携わる多様な人々と対話し協同していくためのコミュニケーションの技法を学んだ。



平田オリザ (劇団青年団主宰 / 東京藝術大学 アートイノベーションセンター特任教授)

続く基調講演では、平田氏による「文化による社会包摂——緩やかなネットワーク社会を目指して」と題した講演が行われた。とりわけ東日本大震災以降、芸術や芸能の社会的役割が注目されているが、平田氏はこうした文化活動のなかに、戦後日本の地域共同体——とりわけ地方社会——が市場原理にのみ込まれる中で喪失してきたコミュニティの機能を回復させるヒントを捉える。平田氏は、文化によるまちづくり、コミュニティ形成を論じるにあたって、「新しい広場」というキーワードを提示した。それは従来の地縁・血縁にもとづく強固な共同体への回帰ではなく、新たな形の重層的な居場所やセーフティネットを担保する緩やかなネットワーク社会の基点となるという。その具体例として、平田氏は八戸ポータルミュージアムや、富良野の地域振興の取り組みを紹介された。最後に、文化による社会包摂と文化資本を蓄積するためのコミュニティづくりの重要性を主張された。

最後に「ボランティアと被災者の対話の力」と題して災害ボランティアに携わってきた登壇者のパネルディスカッションが行われた。学生ボランティア(成安氏)、地域コーディネーター(北村氏)、NPO職員など(浦野氏、吉椿氏)それぞれ異なる立場から、ボランティアを始めたきっかけ、そしてボランティアとして関わり続けてきた思いが語られた。そこに共通したキーワードは、被災者との出会いや縁など、人と人とを結びつけた偶然のつながりであった。パネラーの一人である室崎氏は、災害を(精神的なものも含めて)足りないものを互いに補い合う人間らしい活動を行うチャンスとして捉えたうえで、ボランティアの集う空間を、本来の人間に戻る新しい「広場」として試みることをできると主張した。

(報告: 福田 雄)



(写真左から) 司会: 関 嘉寛 (関西学院大学 社会学部 教授)
パネリスト: 成安有希 (関西学院大学 3 回生) / 北村育美 (福島大学 未来学推進室事務局 地域コーディネーター) / 浦野 愛 (レスキューストックヤード 常務理事) / 吉椿雅道 (CODE 海外災害援助市民センター 事務局長) / 室崎益輝 (ひょうごボランティアプラザ 所長)

公開セミナー

2015年1月12日(月・祝) 於: 関西学院大学F号館104号室

「阪神・淡路大震災の教訓からみた東日本大震災」

公開セミナーは、8人が研究成果を発表した。演題と発表者は以下の通りである。

研究事業・研究報告会趣旨説明 山崎栄一 (関西大学社会安全学部准教授)

報告①「災害とメディア - 阪神・淡路大震災 20 年の復興過程から」磯辺康子 (神戸新聞社編集局社会部デスク・編集委員)



報告②「広域避難者への支援——広域避難者対応についての調査結果を中心に」田並尚恵 (川崎医療福祉大学准教授)

質疑応答

報告③「多様化する避難生活環境—阪神・淡路大震災から東日本大震災までの変容と今後の課題—」石川永子 (千葉大学コミュニティ再生ケアセンター特任准教授)

報告④「みなし仮設住宅～仙台市における「みなし仮設住宅」制度運用の事例から」鳥井静夫 (東京都中小企業振興公社多摩支社主任)

報告⑤「災害関連死に関する問題点」小口幸人 (桜丘法律事務所弁護士)

報告⑥「復興基金義援金」青田良介 (兵庫県立大学政策科学研究所客員研究員)

報告⑦「自治体間連携」阪本真由美 (名古屋大学減災連携研究センター特任准教授)

報告⑧「東日本大震災におけるモノ不足問題から考える災害時の物流の課題」関谷直也 (東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター特任准教授)

総括 中林一樹 (明治大学政治経済学研究科特任教授)

発表成果は後日、他の執筆陣も加え、出版の予定である。

震災バネの想い、どう響いたか

～企画授業の動画配信、受信者から

災害復興学 2014 年度秋学期は「阪神・淡路大震災 20 年 震災バネがつくれた私の人生」と題し、逆境に屈せず、震災復興に尽くした人たちをゲストに招き、それぞれの生き様と心意気を語ってもらった。授業は動画で東北地方をはじめ希望者に配信し、改めて災害復興について考えてもらうきっかけとした。動画授業を受講した 3 人の感想をお届けする。

貝原さんの 『ラスト メッセージ』



矢野 奨

河北新報社報道部副部長

そろそろ明日の朝刊に向けた作業に取りかかろうかという矢先、飛び込んできた知らせにわが耳を疑った。昨年 11 月 13 日、元兵庫県知事の貝原俊民さんが不慮の事故で亡くなりました。関西学院大の教壇に立たれたのは、確かつい先日のことではなかったか？ あらためてインターネットで阪神・淡路大震災 20 年企画授業「震災バネがつくれた私の人生」を閲覧した。そして気付いた。地元関西はもとより東日本大震災の被災地にも幅広くネット中継された 10 月 3 日の講義は、貝原さんから次代を担う若者たちへの、紛れもない「ラストメッセージ」であったのだと。

講義の冒頭、貝原さんは「戦後復興から私の人生は始まった」と述懐している。焦土からの復興を体験した少年は、後に知事として震災からの復興に立ち向かう。震災復興を、日本社会の価値観が百八十度ひっくり返った戦後復興と心の中で重ね合わせたであろうことは想像に難くない。阪神大震災からの復興の代名詞となった「創造的復興」は、そんな貝原さん自身の原体験から生まれた。

刮目すべきは、創造的復興のミッションに三つの「転換」を掲げている点だ。いずれもが日本社会の今日的課題を言い当てており、洞察の鋭さに驚かされる。

阪神大震災では亡くなった人の 50%、仮設住宅に入居した人の 30% が 65 歳以上の高齢者だった。これは、戦後復興のように社会資本さえ整備すれば被災者がその上に自力で暮らしを再建する時代ではもはやなくなったことを示唆していた。

従って創造的復興の第 1 のミッションは「人口構造の転換」にどう対応するかだった。現役を退いた高齢者は「財」を生み出す術を持っていない。これまでに築き上げた資産を少しずつ切り崩すことで暮らしを成り立たせ、同時に現役世代へ富を移譲する。こうした緩やかな「財」のリレーを大規模災害は荒々

しく断絶してしまう。国民一人一人が拠出する基金で災害世帯に住宅再建資金を支給する制度の創設を提唱したのは貝原さんであった。訴えは後に、不完全ではあるが「被災者生活再建支援法」へと結実した。

第 2 のミッションは「社会構造の転換」だった。「官から民へ」は構造改革を推し進めた小泉政権の専売特許ではない。20 年も前に貝原さんが「官主導から民主導の復興へ」と主張している。地方自治の実現を追い求めた人だけに、団体自治から住民自治へと深化していく民主主義の道筋がはっきりと見えていたのかもしれない。

民主導型復興の典型である「ボランティア」が一躍注目を集めたのも阪神大震災の年だった。今日、東日本大震災の被災地を取材して驚かされるのは、ボランティアの若者たちの軽やかで、それでいて真摯な志だ。被災地に住民票を移すボランティアも多い。「いつまで支援を続けるの？」と問い掛けると彼らは「さあ、10 年になるか、20 年になるか」と事も無げに答える。確かに国家としての日本の「勢い」は衰えた（人口構造の転換）。しかし、だからと言って必ずしも悲観することはない。被災地で新たな生き方を模索する若者たちがそう教えてくれている（社会構造の転換）。

阪神大震災からの 20 年を振り返ったとき、第 3 のミッションである「価値観の転換」だけは「うまくいっていない」と貝原さんは率直だ。東日本大震災の発生から半年あまりがすぎたころ、ある講演で貝原さんは「阪神大震災や今回の震災は『わが国の近代化はこれでいいのか』という警鐘に思える。新しいパラダイムにふさわしい復旧・復興を目指さなくてはならない」と述べている。関西学院大での講義もそうなのだが、貝原さんの思想を貫いているのは「復興論とは優れて文明論である」という点であった。災禍と、そこからの復興に立ち向かうということは、文明の在り方を根底から問い直すことにほかならない。

東日本大震災を踏まえて河北新報社は 3 分野 11 項目から成る「東北再生への提言」を発表した。その序文を起草するに当たって私は「『戦後』に替わって『災後』という時代が幕を開けようとしている。私たちは今、歴史の峠に立っている」と筆を起こした。貝原さんの言う「価値観の転換」を私は「歴史の峠」という言葉に込めた。貝原さんが思い描き、果たせなかった第 3 のミッションは今、新たな災後を生きる私たちに託されている。

震災バネが つくった 私の人生



染谷 亜紗子

花泉酒造合名会社（福島県南会津町）

「震災バネ」という言葉を耳にしたのは、今回の企画授業が阪神・淡路大震災から20年となるのに合わせて始まると山中教授から伺った時だ。その時私は、記者を辞め福島に戻ることについて、まさに逡巡の最中にいた。そのせいもあってか、「震災バネ」という言葉は強く私の印象に残り、そしてバネが働いてか否か、私はいま、福島の地で筆を取らせて頂いている。

「先送りしている場合でない」という想い

さて今回の一連の講義では、阪神・淡路大震災を経験し、その後の20年を多方面で活躍されてきた方々が、それぞれの震災後の人生や価値観について語って下さった。「震災バネ」が共通のキーワードだったが、その言葉への各人の受け止め方はそれぞれだった。個人のバネか、コミュニティのバネか。自身の内から突き動かされたバネか、外から押された反動としてのバネか。だが共通していたのは、「あの震災が無ければ、いま歩んでいる人生は無い」という偶然性と必然性であり、復興への原動力としての「バネ」であったという点ではないか。

同じ偶然性と必然性は、阪神・淡路大震災に限らず、その後、日本列島を襲ったそれぞれの被災現場で、人々に原動力としての「バネ」を与え続けてきた。ことし1月、関西学院大学で開催された全国被災地円卓会議。阪神・淡路大震災、鳥取県西部、新潟県中越、三宅島、岩手・宮城内陸、東日本大震災……。それぞれの被災地で動いてきたメンバーが、自身の「バネ」とは何かを言葉にした。「現状への怒りや疑問から」「気が付いたら自然と」「踏み出したら引けなくなった」「壁やしがらみを取り払われた」「動かなければ後悔すると思った」。背景はさまざまであったが、「先送りしている場合ではない」という強い想いが、共通していたと思う。

講義で村井雅清さんの語った「たまたま性の意義」という言葉が頭に残る。20年前の神戸で、もしくは別の被災地で、各人が震災に遭ったことは「たまたま」でしかない。だがその偶然を必然と感じざるを得ない程の影響力が震災にはあり、引き金となってバネを動かした。貝原俊民さんはその様子をこう表現した。「元来“こうしたい”と思っていたことが、震災を機に“やらなければならない”に変わった」と。向き合うことを後回しにしていた事柄に、直視せざるを得なくなる。やはり「先送りしている場合ではない」という強い想いが働いたに違いない。

私自身は、東日本大震災の直後から、報道記者として福島県内で取材を続けていた。突然の避難を余儀なくされた方々、家

族や親しい友人を失った方々、放射性物質の問題によって収穫、搾乳するそばから農作物や原乳を廃棄せざるを得なかった農家、低線量被ばくへの不安から不慣れな土地へ避難せざるを得なかった母子……。誰もがかつてない事態のなかで、かつてない選択と行動を迫られていた。バネという比較的ポジティブな印象を与える言葉で語る事の出来ない現実が、今も被災地で続いていることは前提として忘れないで欲しい。

だがその一方で、各地を歩けば、震災バネを動かしている人に、次々と出会った。避難先で農業を再開させた人、母子避難者が多く集まった他県で、繋がりを保とうとコミュニティを作り出した人。避難先で、震災前には想像も出来なかった進路を選んだ高校生もいた。各人が選択した行動に、影響力の大小や、個人的か社会的かなどを語る必要はなく、どれもが、個人の復興、社会の復興へと繋がる、欠かせないバネだった。

連鎖する「震災バネ」

バネを動かせた人との出会いが繰り返されるなか、私自身も「(地に足付けて福島に関わることを)先送りにしている場合ではない」という想いが強くなっていった。誰かのなかに「バネ」を感じるたび、繰り返し問われていたように思う。「自分はどうありたいのか?」「いま動かなくて後悔しないのか?」と。バネを動かせた人たちの姿が積み重なれば重なるほど、私に「そうせずにはいられない」という想いを強くさせ、報道記者を辞め、福島の食に関わるという道を選択させた。

振り返ってみて感じるのは、「震災バネ」は連鎖し、別の誰かの「震災バネ」を動かすきっかけになっているのではないか、ということだ。円卓会議の場でも、同じようなバネの連鎖を感じた人は他にもいた。「前を向く知人の姿に、自分もと思った」と。その連鎖は時をも超えていた。3.11後の東北の被災地では「神戸が頑張ってきたように、自分たちも復興出来る」という言葉をそこかしこで聞いた。過去に働いたバネは、次の被災地にも影響を与え、復興へと繋がる新たなバネを生み出している。

昔、理科の授業でバネの働きについて習ったことを思い出す。1本よりも2本、3本と、横に並べた方が堪える力が強くなり、2本、3本と、縦に繋がれば、伸びしろが増す。震災バネもまた、同じではないか。1人1人が動かしてきたバネ。その弾みは、いつしか隣の人に共鳴し、気が付けば被災地のいたるところで動き出す。復興を支えているのは、モノでもカネでも制度でもなく、被災した個人個人の心が、それぞれのバネと共に再び前を向くこと。そしてやがて、地域全体、社会全体の復興を支える軸になっていくことだと思う。

宮本匠さんの語っていた復興曲線では、被災した人の感情は一度底へと沈み、そしていつか、再び上を向いて進み始める。その軌跡と、バネが一度縮んでから跳ね上がるという軌跡が同じような動きをたどるのは、おそらく偶然ではない。被災地で今、どんなに底辺にいるように感じて、必ず以前通りに、時には以前以上に、飛躍する時が来る。

私自身はこの福島の地で、東北にとってのその時を目指し、仲間と共に、バネを動かせ続けたいと思う。

企画授業 「震災バネがつくったわたしの人生」 を受講して



宮崎 汐里
中央大学

授業のUstream視聴・復興減災フォーラム出席を通じ、多様な災害に関して様々なフェーズで活動されてきた「復興の立役者」のお話を聴きました。お話そのものは授業で90分、フォーラムで15分でしたが、その背景にある数年・十数年の歩みを感じたのと同時に、その現場現場においてまさに「人」の近くで活動されてきた言葉として重みを感じ、ご本人のエネルギーを感じながらお話を聴けたことに大変感謝しています。それぞれの方から得た具体的な学びは、ノートに大量のメモとしてあり、ふとした時に読み返しています。

被災地に学ぶ日本の課題

私は、幼少から山梨県に住んでおり、幸いにも被災体験も特に大きな挫折もなく、言ってみれば温室育ち、現在はまだまだスキルもない、総合大学に通う学生です。真っ白であると同時に、換言すれば、未来の被災地に生きながら、様々なことにチャレンジ出来る環境に恵まれた存在であると自覚しています。そんな風に自分を位置付けると、ある人の言葉が頭をよぎります。東日本大震災以降通う気仙沼市でお世話になった、黒田裕子さんの言葉です。「あなたたちはこれからの社会を創っていく存在。被災地には日本の課題が転がっている。そこから学びなさい。」その言葉を思いながら授業を振り返ると、多くの教えとともに多くの宿題を受け取ったと気付かされます。

気づいた地域の存在

授業で扱ったこの20年間を考えるにその近い前史を振り返るならば、戦後、大災害がしばらくの間、日本が急速にいわゆる「成長」「発展」を遂げたことからかと思えます。そのいわば終焉期に、阪神淡路大震災が起き、「失われた20年」とほぼ時を同じくして震災復興が目指されました。そういった中で当時の復旧事業に対し、授業でお話された方々が「あるべきは人間復興ではないか」との命題を発信されたように、災害は社会の在り方や価値観へ疑問を投げかけ続けています。今回の授業はまさに、その疑問に気づき問い続けながら多くの人々が不断の努力をし、社会が歩み続けてきたことを感じるものでした。この企画授業で私が感じたことを表現するなら、いつ来るかわからない災害のために準備しておく必要を感じた、というよりは、災害を学ぶことで、たまたま何不自由なく生きて来た

自分や地域の存在に気づき、共同体を維持していくうえで人間が行ってきた不断の努力を自分たちも引き継ぐ必要があると認識した、ということです。生まれた時から特に不自由なく生きて来た背景には、誰かが努力し続けた歴史がありました。そしてそのような努力が結果的に、非常事態が起こった時にもしなやかに復活する力になる、ということだと考えています。

人が人らしく生きるとは

そして、今回の授業では、時代によって災害が変化することも学びました。であるならば、数々の悲しみを少しでも無駄にしないためには、自分たちの時代がいかなるものであるかを捉えることが必要です。現代社会を切り取って表現するならば、貧困・格差の社会であったり、グローバル社会ということを考えれば、世界各国との距離も縮まり、視野を広く持つ必要にも迫られていたりします。社会のありかたと同時に、そこに住む人々の性質や価値観も異なります。都市化後の地域のありかたしか知らない世代も多ければ、バーチャルな世界の方が心地良いと感じ、生身の人間と関わることを苦手とする人もいます。そのなかで、環境と共存しながら、人が人らしく生きる道を探るのように見出し、それに向けてどのように具体的に行動していくか、そういったテーマを宿題としていただいたと思います。

災害と出会い、気づき、自分が今生きる社会を捉えながら努力していく、このことは、災害大国であるこの国で生きるにあたって、古くから多くの人たちが実践してきた当たり前のことなのかもしれません。でも、当たり前のことを当たり前にするのむずかしさも同時に感じます。自分の身の周りを見渡しても、複雑化した社会におけるリスクを思えば怖くなることもあります。でも、そこをどうにかしていこうとするのが人間であり、震災バネなのだと思います。

未来に向け学びを引き継ぐ

黒田裕子さんに続いて貝原俊民さんが亡くなったという知らせがあった後、授業で山中茂樹先生が「阪神淡路大震災が、歴史になろうとしていることを感じる」と語りました。阪神淡路大震災から20年、未来を生きる私たちが手を取り合って努力していくために、災害復興の先輩たちからの学びを引き継ぐことを、改めて決意しました。



かんかんがくがく

被災地を**観**る、
被災地の痛みを**感**じる、
そして、
被災地から**学**ぶ、
被災地の人たちと**楽**しむ。

被災地ネット

笑顔の裏にある「思い」を伝えたい／右田可奈
ボランティアセンターの新しい形／頼政良太

笑顔の裏にある「思い」を伝えたい

NHK 神戸放送局 放送部記者
右田可奈

阪神・淡路大震災から20年。私は、この大きな節目を多くの遺族、被災した人たちと共に立ち会うことができた。

私がNHK神戸放送局に赴任したのは4年前。初めて神戸を訪れた時、すでに生まれ変わった街を目にして、本当に地震があったのかと感じたことを今でも覚えている。その後、震災の取材に携わるようになったが、私は震災を経験していないし、20年前は小学生で揺れの記憶すらない。自身に負い目のようなものを感じながら取材を続けた。

取材では多くの人から話を聞いた。しかし、すぐには実感が浮かばなかった。被災した人たちも、ふだん何事もなかったかのように過ごしていて、辛い経験をしたことを感じさせなかったからだ。それでも、親切にあの時のことを教えてくれた。

なかでも、両親を亡くしたある女性のことが強く印象に残っている。初めて話を聞いた時、彼女は、命がけで子どもたちを助けたこと、両親が亡くなった時のこと、お骨を抱え避難場所を求め歩き回った時のことを一気に話してくれた。壮絶な経験を、時折笑いながら、涙ひとつ見せずに話していた。震災を直接体験していない私を気遣ってくれたのだと思う。それでも私は、涙を流さずにはいられなかった。そして後で聞くと、震災で両親を亡くしたことを周囲に隠してきて、すべて話したのは私が初めてだったという。「辛い話をして周囲に気を使わせたくなかったから」と言う。その後、取材を重ね最終的にカメラの前でインタビューに応じて頂いた。放送後、「取材のおかげで一歩前に進むことができた気がします。ありがとうございます」と言われた。取材を受ける前とは違い、晴れ晴れとした表情だった。

街や人々を一見するだけでは、ここで震災があったのかわからない。しかし、彼女のように、辛い経験を乗り越えようと思いながら、周囲に話すこともできず、時だけがたってしまった人たちは多いのではないか。その後も取材をする中で、多くの方が口にしたのは「あの時で時間が止まったまま」という言葉。そして街も詳しく見ていくと、住まいや商店街、コミュニティなど、いまだに復興の課題が山積している。私は、20年の報道で「復興はまだ終わっていない」という事実を伝えていくと心に決めた。

NHKでは「あの日を胸に“生きる”」をテーマに、あらゆる番組や報道を通して、復興の課題や被災した人々の思いを伝えようとした。未曾有の大災害に人々がどう向き合ってきたのか、あの日の経験を忘れず次の世代に生きてほしいと考えたからだ。東日本大震災などを見ても、私達は災害を避けられない。しかし、神戸で一人一人が体験したことを伝え続けることで、災害で苦しむ人が少しでも減ることを願っている。

を歩き、住民の方々が作るボランティアセンターに受け入れてもらいながら活動を行っていました。

広島土砂災害の被災地は広範囲で、被害は局地的でした。こうした場合に、ボランティアセンター1つで全範囲をカバーすることは難しく、小さな範囲に限定したボランティアセンターの機能を持つサテライトのような場所がなければ、細かい現場レベルでの対応はできません。広島土砂災害の現場で、あちこちに住民独自のボランティアセンターができたことは、一見管理が行き届いておらずバラバラのように見えますが、スムーズにボランティア活動を住民の方々と結びつけ住民の方々のニーズに応えるという意味では、実は非常に重要な役割を果たしていたのです。こうしてそれぞれが情報共有や情報の連携を行えば被災地の全体像も見えてくるはずで

私の経験から考えると、ボランティアセンターの機能は規模が大きくなるほど複雑でマンパワーも必要になり、トラブルも多くなるのでうまく運営することが難しくなります。逆に規模が小さくなればなるほど、少ない人数で効率良く運営ができ、例外的な事案にも対応しやすくなります。つまり、大規模な災害であっても小さなボランティアセンターがたくさんできることで、支援の網からこぼれ落ちる被災者をゼロに近づけていくことができるのです。さらに地域に近いところに小さなボランティアセンターを作ることで、地域の細かい事情がわかりやすいという利点もあります。被災者支援の大事な点は、一人ひとりの状況が違う中で寄り添いながらの支援を行っていくことですが、そうした点からも小さなボランティアセンターの方が一人ひとりの状況がわかりやすく、寄り添う支援がやりやすいのです。

大規模な被災であるから大規模なボランティアセンターという発想だけでは、確実に支援の手からこぼれ落ちる被災者が出てきてしまうのではないかと思います。これからはボランティアセンターの担い手が多様化し、より細かく小さな組織、住民の自主的な組織がたくさんできること、そしてその小さな組織を支えるボランティア活動をしながら、被災者一人ひとりに寄り添う支援が広がってほしいと思います。

ボランティアセンターの新しい形

被災地 NGO 協働センター スタッフ
頼政良太

2014年8月に発生した広島土砂災害。大規模な土砂崩れなどによって避難勧告が解除されずボランティア活動のできる範囲が限定的になったことに加えて、全国的に大きく報道がなされ、県内外から多くのボランティアが集ったことで、社会福祉協議会を中心としたボランティアセンターでは多くのボランティアを受け入れきれない状況でした。

こうした状況の中で、地域で住民自らがボランティアセンター的機能を担い独自にボランティアを受け入れていたところも少なくありません。一部では、避難勧告が出ている状況の中でもボランティア活動を行っていた地域もあります。ボランティアセンターで断られたボランティアたちの多くは自分たちで被災地

年間活動報告

〈研究活動〉

二地域居住研究会〈科研〉

テーマ：①集団移住に伴う地域アイデンティティについての研究

②広域避難者の法的安定性構築についての研究

③広域避難者にかかわる震災パネについての研究

a) 関西西部会（開催：毎月第1土曜日、於：研究所会議室）

b) 東京部会（開催：毎月第3土曜日、於：東京丸の内キャンパス）

4. 5 第2回 ゲスト：伊藤千亜（ママレボ）
演題：「誰が「避難者」を決めるのか」
4. 19 第3回 ゲスト：原田雄一（まちづくりNPO法人新町なみえ）
茂木大樹（早稲田大学 都市・地域研究所）
遠山賢一郎（一般社団法人ふくしま連携復興センター）
演題：「浪江宣言」
5. 10 第4回 広域避難調査の分析及び追跡調査
5. 31 第5回 ゲスト：廣岡千宇（NHK 福島放送局）
6. 7 第6回 報告：田並尚恵（川崎医療福祉大学）
演題：「岡山市における避難者支援の状況」
6. 21 第7回 ゲスト：糸長浩司（日本大学 生物資源科学部）
演題：「原発災害を長期的に乗り越えるための理念・計画・実践—東日本大震災後の飯舘村での支援活動及び二地域居住提案を通して—」
7. 19 第8回 ゲスト：清水奈名子（宇都宮大学 国際学部）
演題：「健康に対する権利と被災者の現状—栃木県からの報告—」
（第4回低線量被曝問題研究会との合同開催）
9. 6 第9回 報告：高橋征仁（山口大学 人文社会学科）
演題：「山形県における避難者支援ネットワークの現状と課題—ボランティア元年からの3年間—」
9. 20 第10回 研究会
10. 4 第11回 研究会
10. 11 第12回 研究会
1. 31 調査結果分析検討会（低線量被曝問題研究会との合同開催）

低線量被曝問題研究会

テーマ：低線量被曝地域の健康管理

（開催：毎月第3土曜日、於：東京丸の内キャンパス）

4. 19 第1回 ゲスト：脇ゆりか（放射能から子どもを守る
う関東ネット）
5. 31 第2回 研究会
6. 21 第3回 研究会
7. 19 第4回 研究会（第8回二地域居住研究会との合同開催）
9. 20 第5回 研究会
10. 11 第6回 研究会
1. 31 調査結果分析検討会（二地域居住研究会との合同開催）

法制度研究会

テーマ：「被災者総合支援法のあらまし」についての研究

（開催：毎月第4土曜、於：研究所会議室）

4. 26 第4回 研究会
5. 24 第5回 研究会
6. 28 第6回 研究会
7. 26 第7回 研究会
8. 23 第8回 研究会
12. 7 第9回 ゲスト：金子由芳（神戸大学大学院国際協
力研究科）
演題：「災害復興における生業支援について
—復興過渡期の被災者支援の体系化—」
2. 28 第10回 ゲスト：廣井 悠（名古屋大学 減災連携
研究センター）
演題：「福島原発からの避難行動に関する
分析」

原発避難白書・周辺地域問題研究会

テーマ：原発避難白書の発刊

（開催：毎月第3水曜日、於：東京丸の内キャンパス）

4. 16 第1回 研究会
5. 21 第2回 研究会
6. 18 第3回 研究会
7. 16 第4回 研究会
7. 30 幹事打合せ
8. 20 第5回 研究会
9. 17 第6回 研究会
10. 15 第7回 研究会
11. 19 第8回 研究会
12. 17 第9回 研究会
1. 21 第10回 研究会
2. 18 第11回 研究会
3. 25 第12回 研究会

地域復興の事起こし研究会

テーマ：住民主体のまちおこし

（開催：毎月第2金曜日、於：研究所会議室）

4. 11 第8回 報告1：松田曜子（災害復興制度研究所）
演題：「高知県黒潮町の取り組みについての現
地訪問報告」
報告2：岡田憲夫（災害復興制度研究所）
演題：「地域復興の事起こし」のパスベクティ
ブづくりと今後の研究会の発展のさせ方について」
5. 30 第9回 ゲスト：満壽正昭（NPO法人徳島防災ネットワーク）
演題：「NPO法人徳島防災ネットワークの活動
について」
6. 20 第10回 報告：山泰幸（人間福祉学部）
演題：「徳島県東みよし町でのまちづくり—民
俗学からの取り組み」
7. 11 第11回 ゲスト：檜垣龍樹（尼崎市武庫地域振興センター）
演題：「土の人風の人—まちづくりの達人は面白い—」
9. 11 第12回 報告1：山泰幸（人間福祉学部）
演題：「松茂町での事起こしの準備会合の状況、
科研へ向けてのフレームワークの提案・検討」
報告2：岡田憲夫（災害復興制度研究所）
演題：「鳥取県智頭町の山郷地区の事起こし紹介」
10. 17 第13回 ゲスト：橋川健祐（人間福祉学部）
演題：「過疎地域の再生と社会的企業の可能性」
11. 14 第14回 ゲスト：Tim McDaniels（プリティッシュ・コ
ロンビア大学）
演題：「Building risk communication
among interdependent groups for self-
organizing efforts to improve disaster
resilience」
報告：福田雄（災害復興制度研究所）
演題：「南三陸町における防災対策庁舎の保存
／解体をめぐる問題」
12. 12 第15回 ゲスト：村上 浩司（自治体等自主防災組織研究会）
演題：「自治体等自主防災組織研究会の活動に
ついて」
1. 23 第16回 ゲスト：金暎根（韓国高麗大学日本研究センター）
演題：「韓国の震災学／災害（災難）学」
2. 13 第17回 報告：稲垣文彦（公益社団法人中越防災安全推進
機構）
3. 20 第18回 報告：野呂雅之（朝日新聞大阪社会部）
演題：「新聞記者における事起こし—アフガニスタン
の干しブドウ—」

〈フォーラム・公開セミナー〉 ※ 詳細は P.2～7 をご参照下さい。

2015年復興・減災フォーラム

1. 10 全国被災地交流集会・円卓会議 テーマ：「震災バネがつなぐ復興への想い」
1. 11 リレートーク テーマ：「届け 震災バネが伝える復興への想い～KOBEからTOHOKUへ」
1. 12 災害ボランティア20年ワークショップ テーマ：「これからのボランティアと対話の力」
1. 12 公開セミナー テーマ：「阪神・淡路大震災の教訓からみた東日本大震災」

公開セミナー

5. 22 国際交流セミナー～韓国・高麗大学校キム・ヨングン先生を迎えて 於：研究所会議室
講師：金暎根・高麗大学校日本研究センターHK教授
演題：「日本の災害ガバナンスにおける逆イメージ：韓国における災害研究の現状及び復興一制度の選択」
3. 7 2014年度研究報告会「原発からの広域避難を考える」 於：東京丸の内キャンパス
《演題・報告者》
「棄民をつくらないための政策提言」山中茂樹（関西学院大学 災害復興制度研究所）
「原発避難白書の刊行にあたって」河崎健一郎（SAFLAN）、木野龍逸、橋本晋吾（JCN）
司会 / 松田曜子（関西学院大学 災害復興制度研究所）
「受け入れ自治体の避難者支援」田並尚恵（川崎医療福祉大学）
「「スラブチチ市」の「町づくり」政策」尾松 亮（ロシア・CIS 地域研究者）
「マーシャル諸島核実験被災コミュニティにおける復興計画と生活再建」中原聖乃（中京大学 社会科学研究所）
「低線量被ばく問題をめぐる地域住民のリスク意識と行動」高橋征仁（山口大学）
「関東汚染地域で何が起きていたか～市民と自治体による4年の軌跡～」脇ゆうりか（放射能からこどもを守ろう関東ネット）



▲第10回法制度研究会

〈アンケート・現地調査〉

- 11～1月 福島4町移住調査「新しいまちづくりについてのアンケート」
福島県双葉、浪江、富岡、大熊4町について、移住・合併などについてのアンケート調査を、NHK福島局と共同で実施。
- 11～1月 「関東地域における東日本大震災と原発事故の影響に関する住民意識調査」
千葉県内の生協会員らを対象に、内部被曝についてのアンケート調査を実施。
7. 19 徳島県松茂町現地説明会 於：徳島県松茂町役場
9. 26 - 27 南海トラフ巨大地震に備える事前復興計画策定準備会
於：徳島県松茂町役場



▲災害復興学

〈支援活動〉

KSNプロジェクト～県外避難者支援活動

（JR西日本あんしん社会財団 東日本大震災に関する活動助成）

6. 22 学習支援 於：西宮市中央公民館
7. 29 交流会イベント 於：千川キャンパス
10. 26 ハロウィンパーティー 於：災害復興制度研究所
11. 23 学習支援・学園祭見学 於：災害復興制度研究所、聖和キャンパス
12. 18 クリスマスパティー 於：関西学院会館
2. 21 交流会イベント
3. 26 交流会イベント

主催：関西学院大学 災害復興制度研究所、NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）、社会福祉法人西宮市社会福祉協議会

後援：西宮市防災計画総務課



▲研究報告会 2015年3月7日



▲徳島県松茂町広島地区演習 2014年9月27日

年間活動報告

〈教育活動〉

* 春学期：「災害復興学入門」

於：西宮上ヶ原キャンパス(代表者：松田曜子)

- 4. 11 「災害復興学とは」 山中茂樹
- 4. 18 「災害と死」 坂口幸弘
- 4. 25 「災害とこころ」 池埜 聡
- 5. 2 「災害復興と事起こし」 岡田憲夫
- 5. 9 「災害復興とボランティア」 関 嘉寛
- 5. 16 「災害復興と法制度」 津久井進
- 5. 23 「災害復興とNPO」 松田曜子
- 5. 30 「災害復興と集落」 稲垣文彦
- 6. 6 「災害復興と都市」 野崎隆一
- 6. 13 「災害復興と自治体の役割」 齋藤富雄
- 6. 20 「災害復興と報道の役割」 磯辺康子
- 6. 27 「災害復興とジェンダー」 池田恵子
- 7. 4 「災害復興とは」 室崎益輝
- 7. 11 「災害復興とは(まとめ)」 松田・山中

* 総合コース「減災まちづくり」

於：三田キャンパス(代表者：岡田憲夫)

- 9. 25 「概論」 岡田憲夫
- 10. 2 「被災地の教訓を「減災」に生かす(1) 阪神淡路大震災と東日本大震災」 室崎益輝
- 10. 9 「被災地の教訓を「減災」に生かす(2) ハリケーン・カトリナとハリケーン・サンディ」 近藤民代
- 10. 16 「被災地の教訓を「減災」に生かす(3) 能登半島地震」 松田曜子
- 10. 23 「被災地の教訓を「減災」に生かす(4) ヨーロッパの災害」 アナ・マリア・クルス
- 11. 6 「減災を支える社会のしくみ(1) 都市計画における減災まちづくり」 加藤晃規
- 11. 13 「減災を支える社会のしくみ(2) 都市計画における減災まちづくり」 加藤晃規
- 11. 20 「減災を支える社会のしくみ(3)」 馬場研介
- 11. 27 「減災を支える社会のしくみ(4)」 畑祥雄
- 12. 4 「減災を支える社会のしくみ(5) ボランティアによる減災」 松田曜子
- 12. 11 「減災を支える社会のしくみ(6) 参加型減災まちづくり」 松田曜子
- 12. 18 「減災まちづくりのシステム論」 岡田憲夫
- 1. 8 「ディスカッション(まとめ)」 松田曜子

* 秋学期：特別企画授業

「災害復興学～震災バネがつくった私の人生」

於：西宮上ヶ原キャンパス(代表者：山中茂樹)

- 9. 26 「震災バネ」 室崎益輝
- 10. 3 「創造的復興/国民的総合安心システム」 貝原俊民
- 10. 10 「学生ボランティア」 稲村和美
- 10. 17 「神戸元気村」 草島進一
- 10. 24 「PTG(ポストトラウマティックグロー)」 高橋征仁
- 11. 7 「不良ボランティア」 村井雅清
- 11. 14 「災害看護～黒田裕子さんの思想と行動～」 室崎益輝
- 11. 21 「コミュニティづくり」 中村順子
- 11. 28 「被災者生活再建支援法」 中川智子
- 12. 5 「復興曲線」 宮本 匠
- 12. 12 「協働による地域再生」 野崎隆一
- 12. 19 「防災」 齋藤富雄
- 1. 9 「復興事始め」 山中茂樹

※ 阪神・淡路大震災20年、災害復興制度研究所10年企画授業として、上記授業をUstreamにて東北学院大学や、希望した個人に動画配信を行った。

〈刊行物〉

- 9. 30 研究紀要 災害復興研究2014 Vol.6
- 3. 31 2015年復興・減災フォーラム記録集

〈掲載記事〉

被災20年 次へ
復興の法制度 断片つぎはぎ 見えぬ道筋

▲ 2014年5月29日「神戸新聞」朝刊1頁

復興体験語るの特別授業
関西学院大学 開学大開講、東北へ動画配信も

◀ 2014年9月27日「産経新聞」朝刊24頁

阪神大震災20年で特別授業
12人の講師 体験語る

▲ 2014年9月25日「読売新聞」夕刊10頁

震災バネ 未来切り開く
開学大連続講義 仙台にも中継

▲ 2014年9月26日「朝日新聞」夕刊16頁

津波に備えて 防災まちづくり

松原町の防災マップ

松原町のハザードマップ

津波の被害想定 最大61cm
死者数 1900人
全世帯被害数 2600世帯

松原町のハザードマップ

1 防災マップを有効活用
2 避難経路を確認
3 避難物資の準備
4 避難訓練の参加

四方面会議システム

1 協議の場を共有
2 避難経路を確認
3 避難物資の準備
4 避難訓練の参加

▲2014年10月17日「朝日新聞」朝刊32頁

新防 力災

高台ない 徳島県松茂町の住民組織

「四面会議」で地域を強く

ドローン 凄まじく視点変え 行動計画練る

松茂町の住民組織「四面会議」は、高台がない地域で、津波や地震などの災害に備えるため、住民の安全を確保することを目的として、防災対策に取り組んでいる。特に、ドローンを用いた視察は、従来の視察とは異なり、高台から俯瞰した視点で、地域の状況を把握できる。これにより、避難経路の確認や、避難物資の準備など、具体的な行動計画を立てることが可能となった。

▲2014年10月30日「朝日新聞」朝刊31頁(兵庫)

阪神大震災20年

安全安心へ価値観転換

関西大連続講義から

前知事 具原俊民さん

具原俊民さんは、阪神大震災20年を機に、安全安心への価値観転換を促している。震災の教訓を踏まえ、防災意識の向上や、防災対策の充実が求められる。また、防災対策の推進には、住民の協力が不可欠である。具原さんは、防災対策の推進には、防災意識の向上や、防災対策の充実が求められる。また、防災対策の推進には、住民の協力が不可欠である。

▲2014年12月17日「朝日新聞」朝刊29頁(兵庫)

阪神大震災20年

住民自治学んだ避難所

関西大連続講義から

尾崎市長 稲村和美さん (42)

稲村和美さんは、阪神大震災20年を機に、住民自治学んだ避難所を推進している。震災の教訓を踏まえ、住民の安全を確保することを目的として、防災対策に取り組んでいる。特に、住民自治学んだ避難所の推進は、住民の協力が不可欠である。稲村さんは、防災対策の推進には、防災意識の向上や、防災対策の充実が求められる。また、防災対策の推進には、住民の協力が不可欠である。

▲2014年12月27日「朝日新聞」朝刊29頁(社会)

「震災バネ」テーマ 関学がフォーラム

関西学院大学の災害復興制度研究所が、1月10-12日、「復興・減災フォーラム」(朝日新聞社後援)を兵庫県西宮市の西宮上ヶ原キャンパスで開く。テーマは「震災バネ」。震災といふ道徳とくじけず、復興と向き合う人々のエネルギーを、社会の再生にどうつなげていくかを考える。

来月、西宮で3日間開催

10日は「全国被災地交流集会・円卓会議」NPO関係者や大学教授ら約30人が一堂に会し、それぞれの被災体験がもたらした人生の転機になったかを語る。

11日は阪神大震災の遺族や福島原発事故の避難者による「リレートーク」。12日は「これからのボランティア」と対話の力」と題し、劇作家の平田オリジさんの基調講演やパネル討論がある。

3日間とも午後1時から。参加希望者は、災害復興制度研究所のホームページ(<http://www.fukukou.net/>)から申し込み、ホームページで入手できる申込用紙をファクス(0798-54-6997)する。

▲2014年12月27日「朝日新聞」朝刊29頁(社会)

阪神大震災20年

支援とは相手になりきる

関西大連続講義から

阪神大震災20年を機に、支援とは相手になりきるというテーマで、関西大連続講義が実施された。講師は、関西大連続講義の講師 田中智子さん。田中さんは、被災者への支援には、相手になりきるという姿勢が不可欠である。被災者の気持ちや状況を理解し、寄り添って支援することが求められる。田中さんは、被災者への支援には、相手になりきるという姿勢が不可欠である。

▲2014年12月20日「朝日新聞」朝刊27頁(兵庫)

阪神大震災20年

振り返らず未来へ歩こう

関西大連続講義から

宝塚市長 中川智子さん (87)

中川智子さんは、阪神大震災20年を機に、振り返らず未来へ歩こうというテーマで、関西大連続講義が実施された。中川さんは、被災者への支援には、相手になりきるという姿勢が不可欠である。被災者の気持ちや状況を理解し、寄り添って支援することが求められる。中川さんは、被災者への支援には、相手になりきるという姿勢が不可欠である。

▲2014年12月25日「朝日新聞」朝刊32頁(兵庫)

社会再生の原動力は 関学大で「復興・減災フォーラム」始まる

関西大連続講義から

「復興・減災フォーラム」が10日、西宮市上ヶ原の関西学院大学で始まる。テーマは「震災バネ」全体テーマに「伝える 震災20年がある」。

11日は「復興・減災フォーラム」の「復興・減災フォーラム」が10日、西宮市上ヶ原の関西学院大学で始まる。テーマは「震災バネ」全体テーマに「伝える 震災20年がある」。

▲2015年1月11日「神戸新聞」朝刊24頁(わかち)

「震災バネ」 体験を語る

関西大連続講義から

関西学院大学の災害復興制度研究所が、1月10-12日、「復興・減災フォーラム」(朝日新聞社後援)を兵庫県西宮市の西宮上ヶ原キャンパスで開く。テーマは「震災バネ」。震災といふ道徳とくじけず、復興と向き合う人々のエネルギーを、社会の再生にどうつなげていくかを考える。

▲2015年1月11日「朝日新聞」朝刊29頁(社会)

阪神・淡路から東日本へ 遺族ら被災を「バネ」に 西宮でリレートーク

関西大連続講義から

阪神・淡路から東日本へ、遺族ら被災を「バネ」に、西宮でリレートークが実施された。講師は、関西大連続講義の講師 田中智子さん。田中さんは、被災者への支援には、相手になりきるという姿勢が不可欠である。被災者の気持ちや状況を理解し、寄り添って支援することが求められる。田中さんは、被災者への支援には、相手になりきるという姿勢が不可欠である。

▲2015年1月12日「神戸新聞」朝刊23頁(社会)

震災を語る 記憶をつなぐ

関西大連続講義から

1.17 3.11 リレートーク

母を亡くしたけれど、出会えた人もいる 中徳さん

息子を失った 転機になった生前の手紙 加藤りつ子さん

京都に避難 支え合いから知ったこと 西山さん

福島で 仕事と子育てを考える 西崎伸子さん

▲2015年1月16日「朝日新聞」朝刊19頁



掲げ続けよう 復興リベラリズムの旗を

3月末日をもって、研究所主任研究員の職を退きます。この災害大国に「復興リベラリズム」の旗を打ち立てようと研究所創設にかかわって10年。2008年には多くの志ある仲間とともに、「共存同衆」の組織理念のもと日本災害復興学会を立ち上げました。わが国で初めて「人間復興」の理論化をめざした災害復興学の講義を始めたのはその前年、2007年のことです。

復興リベラリズムとは、災害からの再起・再生にあたって、最小不幸、機会均等、富の再分配を是とする立場です。共存同衆とは、会員を博士と限定するような閉ざされた官製組織ではなく、広く一般に門戸を開いた学会=Societyを意味します。被災現場で支援にあたる人たちと研究者がともに災害復興のありようを探る現場と研究の融合「現研融合」がモットーです。人間復興とは、被災した人たちや被災地が自身の決断で再生への道を選び、幸福を追求できるような法制度、社会的仕組みをつくらうという理想のほかなりません。

とはいえ、研究所の創設当初は高名な工学者から「耐震化のための制度も出ていないのにもう復興か」というお叱りを受けたことがあります。新自由主義の経済学者からは「私有財産制を前提にする限り、公的支援はその根本原則に反する」との攻撃を受けました。

復興とは、工学者が誤解したような「経済優先」「開発至上主義」とはおおよそ異なります。関東大震災の折、経済学者の福田徳三が唱えたように「復興事業の第一は人間の復興でなければならぬ」。そして「人間の復興とは大災によって破壊せられた生存の機会の復興を意味する」のです。

それゆえに私たちは、災害現場で起きている事実を丹念に掘り起こし、危うい均衡のうえに成り立っているこの社会の「脆弱性」を明らかにしていく必要があります。毎年、欠かさず開いている全国被災地円卓会議は、まさに「現場を共有」し、支援と研究が想いを一つにする場です。

私は、「防災は復興まちづくりの隠し味」「復旧は復興の僕（しもべ）」と考えています。公的施設の復旧には自動的に予算がつきますが、生活復旧は原則、自助努力です。巨大防潮堤の建設がまちづくりの前提とされる現場は、やはり不自然です。まず、人々の再起・再生が優先されるべきでしょう。

とはいえ、人間復興の理論化・制度化・実践化の道のはげわしく、先は見通せません。職は辞めますが、人間復興をめざす務めは、生涯続くのだらうと覚悟しています。(山中茂樹)

★関西学院大学災害復興制度研究所人事（4月1日付）

- ▽主任研究員 野呂雅之（災害復興制度研究所 教授）
退任＝山中茂樹（災害復興制度研究所 教授）（3月31日付）
- ▽顧問 山中茂樹
- ▽運営委員 栗田匡相（経済学部 准教授）、坂口幸弘（人間福祉学部 教授）
退任＝井上球智（経済学部 教授）（3月31日付）、馬場研介（総合政策学部 教授）（3月31日付）
- ▽リサーチアシスタント 金 太宇（社会学研究科 研究科研究員）
退任＝福田 雄（社会学研究科 研究科研究員）

日本災害復興学会 会員募集中!!

ご入会ご希望の方は入会申込書に所定の事項をご記入のうえ、下記の学会事務局まで郵送にてお申し込みください。入会申込書は、日本災害復興学会のホームページ（<http://www.f-gakkai.net/>）よりダウンロードしていただくか、下記までご連絡いただき、お取り寄せください。また、後日事務局よりお送りする専用振り込み用紙にて必要金額をご入金ください。

- (1) 申込書送付先
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学災害復興制度研究所内
日本災害復興学会事務局
TEL: 0798-54-6996
- (2) 入会金 3,000円
- (3) 学会費(年額)

1) 正会員	7,000円	3) 購読会員	6,000円
2) 学生会員	3,000円	4) 賛助会員	一口: 50,000円

■西宮上ヶ原キャンパス

■西宮聖和キャンパス



■神戸三田キャンパス



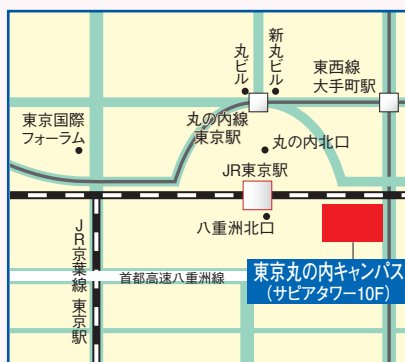
■大阪梅田キャンパス



阪急梅田駅茶屋町口から北へ徒歩5分

〒530-0013 大阪市北区茶屋町 19-19
アプロースタワー 14 階
TEL: 06-6485-5611

■関西学院東京丸の内キャンパス



JR東京駅八重洲北口から徒歩1分

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12
サビアタワー 10 階
TEL: 03-5222-5678



関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY
災害復興制度研究所

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号
TEL: 0798-54-6996 FAX: 0798-54-6997
<http://www.kwansei.ac.jp>
URL: <http://fukkou.net/> E-mail: kgu_fukko2005@fukkou.net